

巻頭言

深瀬 和文

今年初めての絆発刊となりました。去年絆に携わった人や読者に感謝して今年も発刊できる喜びで胸がいっぱいな気持ちです。

話は変わりますが、今急速に変化している医学や福祉用具に期待と希望がだんだん大きくなっています。まず一つはコミュニケーションツールです。

今までのツールは体の動く部分を探しながらスイッチを押し伝の心やレッツチャットを使いながらコミュニケーションをとっていましたが、いま開発中ですが、脳から筋肉を動かそうとするわずかな電流を感知してスイッチを押した状態になることができるコミュニケーションツールが早くても来年には実用できる見込みです。これによって今までコミュニケーションが取れなかった患者（ロックドイン）もコミュニケーションが取れるかもしれないと期待されています。

それと i p s 細胞のことですが、知り合いが i p s 細胞の生みの親山中教授とノーベル賞受賞の直前に話をされたとき、ALS患者の細胞から i p s 細胞を作成した際、神経細胞の突起物が通常より短いことや、治療薬の候補となる化学物を特定された事を説明されたそうです。一昨年、山中教授にあった時に言われた「ALS患者を見捨てないので頑張ってください」という言葉を思い出して、なお一層頑張ろうと思いました。一昨年より去年、去年より今年、遅いですが、だんだん希望の光が明るくなってきています。

常に希望を持って頑張っていきましょう。